



人間の本質

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 嘉太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00000123

人 間 の 本 質

山 本 嘉 太 郎

北海道学藝大学旭川分校

Kataro YAMAMOTO : Essential Nature of Man.

地上のあらゆる生物は—アメーバより人間に至るまで—これを根元的に見れば、運動し變化し生滅しつゝある物質の離合集散相互作用に因つて現象している物質的世界の或一種類に過ぎない。それは神秘なる神の手に依つて創造せられたものでもなければ、宇宙間をさまよう生命の胞子がこの地上に降つて発芽したと云う様なものでもない。それは宇宙の発展の過程に於いて、銀河系内のとくに太陽系内の物質が、二十億年以上もの時間にわたつての進化発展の結果この地上に於いて生成したものに他ならない。けれども生物はつねに新陳代謝し生長生殖し世代交番し斗争調和し進化発展するものであることに因つて、單なる物質の無機的乃至有機的段階を越えたものである。生物は如上の生存活動を爲すものであることに於いてもろもろの物質の世界とは次元の相異なるものと見られ、生物の本質は如上の生存活動とこれを爲し得る複雑なる身体的構造をもつことに存する。けれども人間が他の万物と相異なる所以のものは單に身体的構造の中からだけではこれを完全に見出すことは出来ない。人面獸心と云う言葉もある様に外見的な姿、身体の構造に於ては他の生物と相異なるものであつても、その生存活動に於いては他の生物と相異なるものが存在するからである。それでは人間の本質はどこに求むべきであるか。古來しばしば人間は政治的動物であり理性動物であるとせられ、或いは言語を使用する動物であり火を使用する動物であるとせられ、或いはまた動植物は生命をしかもたぬが人間は精神をもつものとせられ、ここに人間と生物との本質的な差異があると考えられた。この点に人間の本質を求めることは勿論誤謬ではない。これは嚴密には人間の本質を完全に捉えつてくれているのではない。それでは人間の本質は何に見出すべきであらうか。「文化はもと人間に属し、神のものでもなく、動物のものでもない。人間にとつて文化は、一個独自の根源現象として本質的領域を構成する」。(註一)とも考えられた様に我々は人間の本質をその文化現象に於いてもつとも根元的且つ全体的にとらえる事が出来ると思ふ。即ち我

々は、人間の本質はその偉大にして光輝ある文化活動、及びかゝる文化活動を爲し得る複雑精巧なる身体に於いて存すると考える。アメーバの様な單細胞生物としてこの地上に生誕してこのかた、十億年—ガモフの「地球の傳記」によれば十四億年—以上もの悠久なる時間を通して限りない進化発展の結果現在見られる様な生物が生成したこと、そうしてかゝる無限の生物的進化の先端に位する現在の人類が如何に驚嘆に値する複雑靈妙なる身体を獲得し、その中に偉大なる能力を藏しているかは前章に於て述べた通りである。この章に於いてはとくに人間の文化現象について考察する。

ここに文化とは、人間が事物を作る活動—云わば人間の諸機官の共動に因つて支えられた脳髓と手の労働—とかかる文化活動に依つて作られた事物—云わば文化財—を意味する。ところでこの様な人間の文化現象はさまざまの種類に分けて考えることが出来る。

先づ第一に人間は經濟活動を爲しその生存に必要な財を作るものである。即ち人間は自身の労働に依つて自然を加工しこれを自身の生存を支えるところの財に生産する。勿論この様な人間の經濟活動も自身の生存を支えるための活動であることに於いては、動物が餌を求め巢を営む活動と同一の性質のものではある。しかし人間の經濟活動と動物の餌を求め巢を営む活動とは全く異なる段階の活動に属する。動物のすべての生存活動はつねに單なる反射的乃至本能的活動であり、夢現的且つ本能的な朦朧意識の中に行われているに過ぎない。彼等の生存活動に於いては、自然は加工されることも變革されることも無い。まして自然が支配せられると云う様なことは全く見られない。彼等は自然の中にただ單に自然として存在しているのに過ぎない、勿論人間以外の生物と云つても、その種類は無数であり、下等なものより限り無く高等なもの、アメーバ的段階に止まるものから限り無く人間の段階に近づいているものに至るまで存在してはいらぬ。けれども全体的に見れば彼等の生存活動は、新陳代謝し生長生殖し世代交番し斗争調和する活動は勿論、餌

を求め巢を営む活動と云えども、無機的乃至有機的自然界の現象とさほど遠くへだたるものではない。

明らかに人間の生存活動と云えども、それが動物的段階を越えて漸く人間の段階に移行した時の原始的生存に於いては、極めて動物的生存に近い性質のものであつたであらう。現在に於いてさえ人類と呼ばれるものの中に、極めて動物的生存に近い生存の仕方で生きているものもある位である。個体発生は系統発生を反復すると云う生物学の原理によつても明らかである様に、現在に於ける様な高次の進化発展をとげた人類と云えども必然的に自体の中に植物的乃至動物的要素を包蔵しておるものであり、従つてその生存活動に於いてはつねに或何等かの形をとつて動植物的生存が現われてくることは不可避的な現象である。とくに現在より何十万年もの過去の時代の原始人、即ち前述のジャワ人・北京人・ピルトダウン人・ハイデルベルク人及びネアンデルタール人等と呼ばれる亜人的段階の人類の生存活動は、現在この地上の自然の中に住む高等猿類の生存活動と殆んど同様のものであつたであらうことは想像に難くない。人間はその身体の構造に於いても及びその生存の仕方にも、上の様な動物的段階に接する段階から出発しながら、次第次第にかゝる原始的自然的段階を越えて進化発展し始めた、人間の身体の進化に因つてそこに労働の現象が生じ、逆に労働が行われることに因つて身体とくに脳髓と手とが著しく進化し始めた。即ち人間は次第にその進化にともなつて勝れた能力を発揮し始めた脳髓と手とを以つて、牧畜と農耕を営むことを知つた。また生存をおびやかす寒さを防ぐために衣服を作つて着ることを知り、さらにまた自身の安住のために家屋を建築する方法を知つた。しかもこの様な生存を支える財の生産のための道具を發明しこれを使用することを知らなかつた。しばしば人間と動物との区別のためにあげられた火の使用も上の様な生産技術の獲得と共に古く始まつたものであろう。勿論有史以來見られる様な高度の生産技術と精巧巨大にして且つ豊富な財は一挙に生産せられる様なものではなかつたものではない。極めて原始的な極めて幼稚な段階から多くの時間の経過と限り無い研究努力の後に一步一步と達成されて來たものである。人間とその文化は、人間が次に述べる様な社会を組織し、社会生活を営み始めて以來加速度的に進化発展することとなつた。とくに近代社会の成立と共に、そこに形作られた近代科学に支えられて、人間もその文化も誠に驚くべき長足の発展をとげることとなつた。現在の人間は高度に発展した諸科学の知識にもとづき優秀な技術と巨大な機械とを用いて大量な財を生産しつつある。農業牧畜業水産業林業鉱工業等々

数えあげること出来ない程多種多様の生産業が分化発達し、そこに生産せられる莫大な量の財はこれまた驚くべき発達をとげた交通運輸機関を通じ商業を通じて交換分配そうして消費せられつつある。さらに今後科学の発展にともなつてますます生産の技術が進歩し、いよいよ新しい豊富な財が生産せられ、且つその財の公平な交換分配消費のために世界的な経済組織が形作られて行くであらう。この様な高次の経済現象はもはや人間以外の生物には見られないものである。たとえそれは初原に於いては動物の餌を求め巢を営む活動と同一の性質のものであつたとしても、現在の段階に於いては両者は全く質量共に相異なるものとなつている。我々はこの様な人間の固有な経済活動の中に重要な人間の本質の一つを見出す事ができると思う。

とくにここに確認しておかなくてはならないのは、この経済活動が人間の他の文化活動の中で最も根柢的なやうして絶対不可欠なものに属すると云うことこれである。次第に明らかにせられる様に、人間のすべての文化活動は即ちその生存活動—運動し變化し生滅する物質の集合体としての生物乃至人間に運命的に背負された生きんとする絶対運動—であるが、なかんづく経済活動は人間の身体の生存を直接に支える財を生産する活動である。人間は労働とこの労働によつて生産された財無くしては寸時も生存することはできない。しかしそれにもかゝらずこの地上に於いて生産せられる財の量は、増加し行く人口に対してその需要を十分に充たすためには、つねに不足である。それ故どの時代にも地上の大多数の人間の最大の労力が、かゝる財の生産のために費されて來た。そうしてまたこの地上に於ける財の資源も、こゝかしこに地域的に散在し且つその量も限られている。動物と動物、動物と人間、人間と人間の間にかける激しい斗争はしばしばかかる不足の財乃至財の資源の獲得をめぐる起つたものである。すべて生きとし生けるものにとつてそうであるが、また人間にとつても生存のための財を獲得し様とする活動は、それらが生き行く限り絶対に不可避的な且つ根源的な活動である。すべての他の生存活動はこの上に立つて始めて可能となる。社会科学に於いて経済的組織乃至活動が人間のあらゆる社会組織乃至活動にとつて土台であるとせられるのは上の様な意味に於いて正しい。(註二)

奇しくも地上の生きとし生けるものには生存のための財を求めて斗争し行かねばならない運命が生誕の始源から背負わされているかにさえ見える。植物が出現すれば忽ちそれを食して生きる草食動物が出現し、草食動物が出現すればさらに忽ちそれを食して生きる肉食動物が出

現してきた。人間の求める財の多くの部分、とくに自体の生存を直接に支えるところの衣食住のための財の大部分が他の生物体であることを自覚するとき、人は誰しも人間と生物との間に不可避の運命的に成り立つた生存斗争の悲劇を自覚し戦慄しないわけにはいかないであろう。この弱肉強食の現象を如何に美しく藝術をもつて色どり宗教をもつて救つて見たとしてもそれが悲劇的な生存斗争であることは依然としておおいかくすべくもない。この様な悲劇的なしかも不可避的な運命から解放せられることは後に知られる様に人間の科学的知識とその実践に依らなくてはならないのである。

次に第二に我々は人間の文化現象の一つである社会現象について見る、ここに社会現象とは人間のもろもろの集團的活動—即ち社会活動—と共にこの様な活動に於いて追求せられるところの法を意味する。人間はつねに個体として生存すると共に上の様な社会を組織しその中の構成分子の一員として生存する。即ち人間は他の何人にも束縛せられない自由なる個人として生存すると共に、同時にまた家族村落民族國民等々のさまざまな集團に重層的に参加してその中の一要素として生存している。もちろん如何なる種類の生物と云えどもつねに完全に自らの種族と無関係に生存するものではない。もろもろの生物は生れながらにして自体のぞくする種族の一個の原子的な存在である、生物は皆自体の属する種族と集團的な関係の中に生きるものと見られる。集團なくして個体は存在せず、また個体無くして集團も存在し得ない。従つて植物の聚落や動物の群棲の様な現象も根源的には人間に於ける社会現象と何等異なるものではないのである。たしかに今から何十万年もの過去に於ける云わば人類の原始社会は秩序も無ければ法もない全く自然発生的段階のものであり、混沌醜態意識の中に本能的に集合したものであり、植物の聚落、動物の群棲と幾ばくもへだたつたものではなかつたであろう。しかし歴史の経過と共に人類の個体の進化はやがてその集團の発展を促し、逆にかゝる集團組織の発展は個体の進化をも促して次第に高次の社会が組織せられることとなつたのである。歴史的にさかのぼり得る古代社会はすでに自然発生的段階を越えつつあつた。が近代社会の成立までには悠久の歴史が流れ去り、ゆるやかな進化がつついた。そうして遂に現在の段階に於ける様な複雑にして高次の秩序的社會が組織せられる様になつた。さらにまたこの社会組織は一そう高次の段階に発展しつつある。この様な社会現象は、もはや他の生物の集團生活現象とは全く異質的なものである。この様な意味に於いて我々は人間の本質をその社会現象の中に見出すことが出来るのである。

ところで社会は、古來の悠久な時間の経過につれて人間がさまざまな集團生活を反復し行く中に自然に組織せられたものであるが、またその都度秀れた思想家や政治家の活動によつて進化発展せしめられてきたものである。この様な人為的乃至自然的な社会の進化発展はつねによりよく人間の生存を可能ならしめる方向に向つて行われるものである。すべての生物のあらゆる生存活動はこれを全体的に見ればつねにその個体と種族のより良き生存に向つての運動であると考えられる。人間が社会を組織しその中に於いて社会活動を爲すのはすべての人間にとつて最も良い生存を可能ならしめるためである。家族は單に一人の家長のために組織せられるものではない、それを構成する全員のためである。國家も單に特定の主権者や段階のために組織せられるものではない、それを構成する全國民のためである。人間社会の組織は、單なる個人主義とくに利己主義の方向に向つても單なる全体主義に向つても進化発展するものではない。それは地上のすべての人間が最善の生存を営むことができる様な云わば人類主義的な方向を辿つて進化発展するものである。古來自閉的な小地域社会が次第に崩壊して、より大なる社会に発展しつつある歴史的現実はこの知識が眞理であることを示している。今後の社会組織はさきの經濟組織と共に、人類の知能が発展する限り、地上の全人類を結合する世界的組織に向つて一段一段と発展して行くことであろう。

人間は上の様な社会を組織しその秩序を維持するために法を作る。法は社会がそれにもつて成立し人間がそれに則つて行爲すべき規範である。社会が人間の最良の生存の爲に組織せられるものであると同様にこの法もまたこれを可能ならしめるために立てられるものである。この様な社会や法の本質はどこ迄も變らないであろう。けれども未だ進化発展の途上にある人間の社会もその立法も完全なものではない。それはつねに人間の進化と共に発展すべきものなのである。ところで法は人間によつて作られるものであるが、一度作られると逆に人間を支配し始める。しかしつねに進化発展しつつある人間に依つて組織せられる社会や立てられる法は形式的には絶対不動のものではあり得ない。法は人間の最善の生存を可能ならしめるために常にその欠陥を改正せられ、社会もまたつねに最善の人間存在を実現するために発展し行くべき運命を有する。

次に第三に我々は人間の文化現象の一つである道徳現象について見る。ここに道徳現象とは人間がその理想的な進化発展のために爲す生存活動及びかかる活動を規定する善乃至道徳法を意味する。云わばそれは倫理とその

実践を意味する。およそ如何なる種類の生物の生存活動と云えども、必ずそれは生存せんとする絶対運動であり、つねにその中にそれぞれの種族の進化発展のための絶対意志が原動力をなしている。しかし彼等のすべてのものは自身の生存活動が如何にして自身の種族の進化発展のための活動であるかを自覚するところの機官をもつに至っていない。そうしてまたたといこの様な機官をもつていてもこれを自覚する能力があるまでには発達しておらない。人間以外の生物の生存活動は、もちろん下等生物のそれから高等生物のそれに至るまで幾層もの段階はあるが、おしなべて未だ無自覚な自然現象に連なり本能的なうごめきの段階にとどまるものである。人間の生存活動もまたその原始的亜人的段階に於いては上の様な自然的本能的段階のものであつた。しかし次第に人間の脳髓が発達して、如何なる生存活動が人間の進化発展をもたらすかを自覚し得る能力を獲得した。人間は古來さまざまな個人的及び社会的生存活動を反復する中に自然に慣習を作り、さらにこれを母体として倫理乃至道徳法を成立せしめた。そうして何が善であり悪であるか、何が正義であり不正であるかについて批判し得る能力を体得したのである。このことは実践哲学乃至倫理学の成立発展と共に可能となつた事は云うまでもない。

倫理学者達によつて善とは最大多数の最大幸福であるとせられ(註三) 倫理とは人間存在の理法であるとせられた様に(註四) すべて人間にとつて善なるものであり倫理的なものであるとして考えられるものはつねに或る何等かの意味に於いて個人的及び種族的なより良い生存を実現せしめその進化発展を可能ならしめるものである。逆に人間にとつて悪なるもの非倫理的なものとして考えられるものは、つねに直接にか或るいは間接にかその生存に有害なものでありその進化発展を退化滅亡に逆轉させるものである。人間はつねに自身の理想的な生存と進化発展のために善悪を批判し、非倫理的なものを否定して倫理的なものを肯定し発展せしめる。徳目や道徳法さらにこの土台の上に立つ法律はこの様な倫理的な審判を通じて形作られるのである。

ところでこの善なるもの倫理的なものとはつねに必ずしも一定不変のものではない。それは個人及び社会の進化に相應じて発展し行くべきものなのである。現在に於いて人間存在の絶対的な理法と考えられている例えば慈悲や愛や無上命法の思想も人類にとつて永劫に妥当するものとは限らない。ただ他の善なるものに比して時空的に長く且つ大なる普遍妥当性を有するに過ぎない。けれどもこの様な善や倫理の相対性は決してその重要性を損じはしない。人間の脳髓の進化とそれによる科学の発展

とは人間をして宗教的迷信と権力的支配の悪魔から解放せしめる。しかし解放せられた自由な人間の存在は一そう嚴肅な倫理的な審判に依つて支えられる他はない。けだし人間の中には道徳的なものと共につねに非道徳的なもの、正善なるものと共につねに邪悪なるものが存在しているからである。そうしてまた人類が如何に道徳的に高次の段階にまで発展した場合に於いてもその中にはつねに非道徳的な人間非倫理的な人間が存在するであろうからである。この様に理想的生存のために正善なるもの倫理的なものを探究しこれを実践することは人間にとつて絶対的な当爲である。そうしてこの様な道徳現象は人間の重要な文化現象の一つであり人間の本質をなすものである。

次に第四に我々は人間の藝術現象について見る。ここに藝術現象とは人間が美的なものを探究し藝術作品を創作する活動及びかかる審美活動の成果としての美的なものや藝術作品を意味する。この様な藝術現象は文藝音楽造形美術及び映画等を含むものである。人間に於いて見られるこの様な藝術現象もその初原的な段階にさかのぼれば動物の或る生存活動と類似のものとして考えられる。例えば動物の美声を発して鳴きさえずる活動は原始的巫人の歌謡や乱舞と遠くへだたるものではなかつた。音楽や文藝や舞踊の源流はすでにここに発している。然し人間は身体的に次第に高次の段階に進化するにつれて、この様な自然発生的な衝動や感情の表現活動の段階を越えてこれを自覚的に美的なものを追求する藝術活動にまで発展せしめたのである。現代の音楽や舞踊は原始時代の歌謡乱舞に起源しながら今や全くそれと異なる高次の段階に発展した。即ち現在の藝術としての音楽は高次の音楽理論と秀れたる技術と精巧巨大なる機械とに支えられて成立し、舞踊もまたたわむれや乱舞の段階を越えて舞踊理論の上に立つ一つの独立した藝術となつている。文藝もまた原始時代に於ける單なる口誦文学の様な自然発生的段階をはるかに越えて、豊富なる文字言語と秀れたる文学理論と深刻な思想感情体験を土台とする高次の藝術となつている。その他絵画彫刻等々も現在に於いてはそれぞれの理論に支えられて高次の段階の藝術となつている。とくに映画は文藝音楽舞踊造形美術等々の綜合によつて成立する最も高次の段階に到達したところの綜合的藝術である。我々は人間を他の生物から區別する重要な尺度の一つをこの藝術現象に於いても見出すことができる。けれども人間のこの様な藝術活動も本質的には他の文化活動と同様に理想的生存を実現しようとする生存活動の一つに他ならない。即ち藝術現象の本質もそれが人間の進化発展を可能にするものであるところに

存する。藝術の本質について、藝術のための藝術であるべきことを主張する考え（註五）は人生のための藝術であるべきことを主張する考えと矛盾するものではない。藝術のための藝術を考え、藝術の絶対独立を力説する思想は、藝術の自由にして且つ完全な発展を旨とする立場から生れる。藝術活動が人間の生存活動の一つである限り、それは決して人生と無関係ではあり得ない。しばしば始めより意識的に人生に役立つために作られた藝術が自ら設けた条件にしばられて普遍性を失い、かえつて人生に役立つことができな場合がある。これに対して藝術のための藝術を主張する立場は、その自由なしかも純粹な創作意志に依つてより普遍的な傑作を生み、これに依つてより大きく人生に貢献している。ところで藝術の発展は藝術学乃至美学の共働に依つて最も良く可能となる。美学に於いては美的範疇として狹義の美、醜美、優美、悲壯美、崇高美、滑稽美、腐美等々が考えられている（註六）。およそ人間にとつて美的に感ぜられるものは必ず或る何等かの意味に於いてそのより良い生存を可能ならしめるものである。自然に於いても人工的なものに於いても人間がそこに美を見出し得るものは直接にか或るいはまた間接にか人間の進化発展に関係のあるものである。何が美的なものの本質かについての美学の解答はまちまちである。が少くとも美的なるものの最も普遍的な性質はそれが或る何等かの意味に於いて人間のより理想的な生存を促進する性質であり、ここにその本質があるものと考えることができる。この様に考え見れば経済に於ける財、社会に於ける法、道徳に於ける善、宗教に於ける聖、そして藝術に於ける美は何れも皆人間のより理想的な生存を可能ならしめる共通の本質を有することが知られるのである。

次に第五に我々は科学現象について見る。ここに科学とは人間がもろもろの世界を認識する学的活動とかかる学的活動に依つて確立せられる眞理としての知識体系とを同時に意味する。即ちそれは物理学、天文学、化学、生物学、人類学、医学、工学、農学等々の自然科学ばかりでなく哲学、史学、文学、法学、経済学等々の文化科学をも含め諸学一般を意味する。さてこの学的認識活動もその初源の段階にさかのぼれば原始人の低次なる意識活動に達する。そうしてまた、この原始人の意識活動も根源的には進化した霊長類の意識活動と甚だしく異なるものではなかつた。少くとも脳髓を有するすべての生物はそれぞれの脳髓の組織に應じてそれぞれの段階の意識活動をおこなっているのである。しかし人間の脳髓と手とは、幾万年幾十年にわたる時間を費しての進化の結果、次第に複雑高次な組織を獲得し、勝れたる認識能

力と技術とを發揮し得る様になつた。とは云え人間の文化一般の発展の速度もそうであつたが、とくに科学の発展の速度はゆるやかであつた。人間に学の歴史が始まつたのは二千数百年このかたのことである。しかし一度人間が科学を形成し得る段階に達するとその後の人間と科学の形成以來の科学及び技術の発展高揚は、それ以前の悠久な時間を費して果されたそれに幾層倍であるか測り知れないものがある。ところで学は身体なかんづく脳髓の勝れた人間の生存活動—云わば眞理の自覚とそれへの愛—に依つて形成せられるものである。がとくにその高度の発展は文字言語の作成、学的対象及び方法の確立と批判、さらにまた多くの学者の共同研究そうして精巧巨大な人工的感覚機官としての機械の発明に依つて可能となつた。即ち人間は文字を作成しこれによつて知識を表現し、知識を儼なく消滅する肉体から独立させ永世不死のものとした。この文字表現に因つて知識は体系化され且つ身体の去來存亡を越えて永生し、後につづく人間に依つて受けつがれその都度発展せしめられることが可能となつた。学的推理や判断や理論の組織等々の学的認識活動はつねに文字を通して始めて可能となる。また近代以來始められた科学の基礎前提の批判、対象の限定、方法の確立は学を非常な勢で分化発展せしめることとなつた。ことに科学的天才の手に依つて作られてきた望遠鏡、顯微鏡、写真機、サイクロトロン、シンクロトロンその他さまざまの機械は第二の人工的感覚機官として近代このかた如何に限り無く人間をしてかつて不可知的であつた世界を認識せしめ驚くべき科学の発展を可能ならしめたかは前章に於いても述べた通りである。しばしば科学は部分的には突如一人の天才に依つても発展せしめられるが、しかしそれは全体的には多くの学者の共働と社会の支援を得て一步一步と前進せしめられる。近代以來の科学の発展は多くの大学や研究所の設立及びそこに於ける科学の教育研究に依つて可能となつたものである。人間は今やこの科学を通して多くの自然の理法を認識し自然の一部を支配し得るものとなつている。人間は科学を創造し発展せしめることに依つて自然としての生物の段階を超越した。科学現象は人間をして眞の人間たらしめる最も輝やかな文化現象なのである。人間の科学的認識活動及びその成果としての眞理は人間の進化発展を最も良く可能ならしめるものであり、その本質はまさにここに存在する、科学は科学のために研究せらるべきものであり、眞理は眞理のために探究せらるべきものであるとする立場（註七）は決して上の考えと矛盾するものではない。この立場は、藝術のための藝術を主張する立場が最も良く藝術を発展せしめると同様に、科学

者をして自由に且つひたむきに科学的眞理の探究に進む勇氣をあたえ、最もよく科学を前進せしめる。そうしてこの最高の科学の発展を通して、かえつて全人類の最大幸福的生存に役立つことが出来る。なるほど科学の眞理が人生に有害である様に使用せられる場合もなくはない。例えば物理科学の眞理と技術とが戦争に於いて毒ガスとして使用せられ人間に無残な死をもたらすこと、或るいは強烈な殺生力や破壊力をもつ爆弾や焼夷弾として使用せられ多くの貴重な人命と財宝とがほうむられ滅されること、或るいはまた恐るべきエネルギーをもつ原爆水爆として使用せられ一挙に幾十万人の人命が奪い去られ限り無い惨禍を生ぜしめること等々がこれである。けれどもこの様な自然科学が人間にもたらす害毒は、人間科学の知識とその実践に依つて起さないことができるものである。科学の眞理が人生に害をあたえるのは、それが残忍な猛獸の人間に依つて恣意に悪用せられる場合である。すべての科学的認識活動とその眞理は、没價値的なものを対象とする自然科学の研究とその眞理をも含めて、つねに或る何等かの関係に於いて人生に価値をもち得る。地上の人間の生存には一見全く無関係と思われるところの天体を対象とする天文学の成果が他の科学の研究に如何に多くの貢献をし且つ人間の人生観宇宙観に如何に決定的な知識をあたえているかを知れば、一切が明白となる。人間のすべての文化現象はそれぞれを対象とする科学に依つて正しくみちびかれることに依つて最も良く前進するものであることを知らなくてはならない。財や法は勿論すべて善なるもの美なるものは人間の理想的生存を可能ならしめ進化発展を可能ならしめるものであることにその本質を存する。科学の眞理もまた正にここにその本質を存するのである。

最後に第六に我々は科学に次いで重要な人間の本質の一つに教えられる教育現象について見る。ここに教育現象とは人間が人間を作る活動である。即ちそれは人間が子孫を生みそだて子孫をして理想的人間に向つて限り無く生長発展せしめる活動を意味する。ところでこの意味に於ける人間の教育現象もまた他の文化現象の場合と同様に、その初原的段階に於いては動物が自己の子孫を哺育する活動と甚だしく異なるものではなかつた。動物の生活に於いても自身の生んだ子孫を愛撫し保護し哺育してたくましい後継者にまで成長せしめる習性が見られる。けれども動物の生活に見られるこの様な子孫育成の活動はもつぱら自然的本能や習性の段階に止まるものである。人間以外のすべての動物の生存活動はつねに自然的本能に基くものである。このことは動物の中で最も高次の段階に進化した霊長類の身体とくに脳髓の構造から

起る必然の結果なのである。即ち動物の生存活動を司る脳髓は、人間のそれとは異なり、本能活動を司る部分だけが発達して、知能を司る部分は未発達であるか或るいは全く缺如しているからである。動物の生存活動がすべて自然的本能的活動でしかあり得ない理由はまさにここに存する。

ところが独り人間は、身体とくに脳髓の構造に於いて無限の進化発展をとげた。人間の脳髓は知能を司る部分が大部分を占め限り無く複雑高次の構造にまで発展し靈妙にして且つ偉大なる認識能力を獲得している。人間は自身のあらゆる生存活動をこの脳髓に於ける明確な意識と自覚に基づいて営んでいる。近代以來の人類間に見られる教育活動は、もはや動物に於ける自然本能や習性に基くところの哺育活動とは次元の全く異なるものである。現段階に於ける教育活動は教育についてのもろもろの科学の基礎の上に立ち明確な理想の人間形成の自覚の上に立つて営まれている。古くは家庭や教会や職場に限られていた教育の場は今や組織的な教育制度の確立と各種の教育機関の設立に依つて充実拡大せられている。すべての人間は自身の子孫後継者の完全なる生長発展を希望し、津々浦々に至るまで学校を立ててこれをここに收容し、これを理想的人間にまで形成することに大なる努力を払いつつある。明らかに人間の身体及びその能力には生長発展の限度があり、従つてまたその教育の可能範囲にも限界がある。けだし人間はその生誕と同時に親ゆずりの遺傳的先天性を背負いこみ、その親の身体的素質から傳わる身体的能力の発展の限界が決定せられているからである。それ故に可能範囲の一そうの拡大、人間の身体及びその能力の一そうの生長発展のためには、優生学の知識が應用せられなくてはならないであろう。とにかく人間は如何なる人間が理想的人間であるかをつねに探究して、自身の子孫を限りなくこの理想的人間にまで形成し様と努力している。この様な理想的人間を形成しようとする自覚的な教育現象は人間をして人間たらしめている重要な本質なのである。

人間の文化現象は以上の弁証において探究されつくしたわけではない、未だ論及せられない多くのものが残されている。が何れにせよ如上の文化現象は人間に於ける固有特殊のものであり、人間をして人間たらしめる本質を成すものであることが認識せられた。そうしてまた同時にこの人間の文化活動は、人間に運命的不可避的に與えられているところの生存せんとする絶対運動、もしくは理想的生存な実現せんとする絶対意志に因つて生起していることを自覚しなければならぬのである。

(「世界観の哲学」の一節)

- 註一 池上鎌三；文化哲学基礎論 1937.
註二 N. Bucharin；Theorie des historischen
Materialismus, 1921.
註三 Bentham；Introduction to the Principles
of Morals and Legislation, 1789.
註四 和辻哲郎；倫理学 上卷 1936.
註五 Cassagne；La théorie de l'art pour l'art
en France, 1850.
註六 Dessoir；Aesthetik und allgemeine Kunst-
wissenschaft, 1906.
註七 Poincaré；La Valeur de la Science, 1905,
Windelband；Der Wille zur Wahrheit, 1909.
-